

古今東西、昔から伝えられているおとぎ話から現代の映画やマンガまで、お金や経済にまつわる物語は数え切れないほどたくさんあります。今回は昔も今も変わらない、庶民の暮らしが垣間見える江戸川柳を取り上げます。

## 第5回

### 江戸の昔も変わらない暮らしのホンネ!?

# 「江戸川柳」

五・七・五の心地よいリズムで作られる川柳は、俳句のように季語を必要としない気軽さもあり、子どもからお年寄りまで広く親しまれています。最近ではサラリーマンの悲哀を取り上げたり、夫婦や税金、トイレなどさまざまなテーマの川柳コンテストも開催されており、誰も一度ぐらいは考えてみたことがあるのではないしょうか。

川柳は江戸時代中頃から盛んになったといわれています。明和二年(1765年)から天保十一年(1840年)に発行された川柳集の『誹風柳多留(はいふうやなぎだる)』は、江戸時代の庶民の日々の暮らしの「コマ」が表現され人気を博しました。今回はその中から、お金にまつわる川柳をご紹介します。まずは江戸っ子気質をベースにした句。

### 江戸者の 生まれそこない 金を貯め

自分がお金がないのはチャキチャキの江戸っ子だからだと釋がっているわけですが、当時の江戸は、棒手振り(行商)や職人などの日銭を稼ぐ商売も多かったため、たとえお金を使い切っても明くる日にはすぐに稼げたのだそうです。

### お次はこちら。かごちんを やって女房ハ つんとする

酔って駕籠(かご)を使って帰ってきたら駕籠賃が足りず、代わって支払った女房が不機嫌になるという状況は、タクシーで帰宅したお父さんとまったく同じで、様子が目に浮かびますね。次の句も今も昔も変わりません。

### 新見世と いへばわづかな 欲を買ひ

新規オープンと聞けば、粗品目当てについてい出かけてしまうもの。



このように、あれこれ使っていると、稼いだお金もすぐになくなってしまいます。そして、家計が火の車になると…

### これ小判 たった一ト晩 居てくれる

当時長屋の住人にとっての一文(約5〜10万円)は、ほぼ月収に等しい水準です。それがその日のうちに借金の支払いで手元に残らない。せめて一晩だけでも…と切なくなります。ではお金持ちなら…?

### 金持ちの 人魂行きつ もどりつ

残した財産が気になって、往生できないというわけです。庶民の気楽さに共感してしまいますね。皆さんも、お財布をのぞいて、一句いかがですか。